

社会運動論の方法論的レパートリーの拡充

— エスノメソドロジー・構築主義・分析的括弧入れによる運動研究 —

濱 西 栄 司

1. はじめに

本稿の目的は、社会運動論の「分裂」に対する、方法論的な整理・統合の試みを、その問題点を修正するかたちで、発展させることにある。

まず社会運動論の「分裂」状況と、それに対する大畑（2004）の方法論的整理のもつ意義及びその問題点——科学方法論に依拠するがゆえに科学的営みとそれ以外の峻別に懐疑的なアプローチを排除する——について指摘する（2節）。次に、科学的営みとそれ以外の峻別を避けるアプローチとして、具体的にエスノメソドロジーと一部の構築主義、そして両者の混合形態を挙げ（3節）、それらにもとづく運動研究の具体的な形態を、事例を紹介しつつ整理する（4節）。それらの運動研究と従来の運動研究の関係性について考察し、最終的に全体を統合可能な、より包括的な方法論的枠組みを構築する（5節）。

2. 社会運動論の「分裂」——科学方法論にもとづく方法論的統合の試みとその限界

現在、社会運動論は、国際的なレベルでは大きく二分されている（Wieviorka[2005: 1]）。一つ目は、いわゆる「新しい社会運動論」やモダニティ論、カルチュラルスタディーズ、そしてとりわけトゥレーヌ学派⁽¹⁾による運動研究の流れであり、*Social Movements Studies*誌（2002年～）、国際社会学会においてはリサーチコミッティー47「社会階級・社会運動」（1992年～）を中心とするものである。二つ目は、おなじくリサーチコミッティー

⁽¹⁾ Tourainian。A.トゥレーヌとその後継者たち（現国際社会学会長[2006-2010年]のM.ヴィヴィオルカやF.デュベ、K.マクドナルド[第二世代]、およびその弟子たち[第三世代]）から構成され、パリ社会科学高等研究院（EHESS）の社会学的分析介入センター（CADIS）・社会運動研究センター（CEM）、およびフランス国立科学センター（CNRS）、国際社会学会リサーチコミッティー47「社会階級・社会運動」などを拠点に活動している（Cf. 稲葉[2004]；濱西[2005a][2005b][forthcoming]）。中心は、CADIS (<http://www.ehess.fr/cadis/>)。

ー48「社会運動・集合行為・社会変動」(1993年～)や*Mobilization*誌(1996年～)などで展開されている、資源動員論、政治的機会構造論、フレーム論、およびそれらの総合理論、そしてとりわけ近年の「対決の政治」(Contentious Politics)と呼ばれる学際的研究⁽²⁾などの流れである。どちらも欧州と北米の長い運動論の系譜を受け継ぐものであるが⁽³⁾、とりわけ1980年代以降、各々の系譜のなかで総合・精緻化がおこなわれてきた結果、今や、互いに他を相当程度まで包摂できているという自己理解を形成するに至っている⁽⁴⁾。しかしながら、そのような状況は、社会運動論の「分裂」がいよいよ通約不能なほど激しいレベルに達したということを意味しているのである。

このような社会運動論の「分裂」状況に対して、大畑(2004)の議論は、もっとも有効な対処策となりうると筆者は考える⁽⁵⁾。G.H.フォン・ウリクト(Wright[1971])⁽⁶⁾が概略的に整理した説明／解釈という科学方法論上の区分——解釈とは、「『これは何である』か」という問いに答えることをめざす」ものであり、説明とは、「なぜデモ行進が行われたのか、あるいは何が革命の『原因』だったのか」を問うものである——を、大畑は本格的に社会運動論に導入した。彼は、「運動の説明」の例として資源動員論を含む中範囲の「運動社会学」を挙げ、「運動の解釈」の例として「新しい社会運動」論、「モダニティ論」(ベック、バウマン、ギデンズ、メルッチなど)を挙げつつ、社会運動論の二つの流れの一部を、方法論的に位置づけ直したのである⁽⁷⁾。

⁽²⁾ 1960年代から発展してきた資源動員論、政治的機会構造論、フレーム分析を統合しつつ、しかしそれらの適用対象が自由主義社会や社会運動に限定されがちであったことを自己批判するかたちで1995年から本格的に始動し始めた、政治学者・歴史学者・社会学者(A.オバショールやC.ティリー)などによる国際比較・歴史比較の学際的プロジェクトのことである。「対決の政治」という用語は、議会や政党などによる制度化された政治領域とは区別される、社会運動や革命、テロリズムなどの非制度的な政治領域を指している。コロンビア大学、メリーランド大学、コーネル大学などを拠点にプロジェクトが進められている(Cf. McAdam, Tarrow & Tilly[2001]; Tilly & Tarrow[2007]; Tarrow[1998=2006])。

⁽³⁾ 概略を示せば、欧州では主として、市民革命論(19世紀)から社会主義・労働運動論(19世紀半ば)と群衆論(19世紀末)、大衆論(20世紀前半)を経て、「新しい社会運動」論(1960年代以降)、そしてトゥレーヌ学派の突出へ、という運動論の系譜が確認でき、北米では、主として、群衆・大衆論(1920年代)から集合行動論(1930年代)へ、相対的剥奪論(1940・50年代)へとすすみ、1960年代以降は資源動員論、政治的機会構造論、フレーム論、および総合理論などが展開され、90年代半ばから「対決の政治」へ、という系譜が確認できる。

⁽⁴⁾ 二つの流れを意識し、それらを統合しようとする議論は世界的に多く存在した(Cf. Touraine[1985]; Touraine[1991]; Klandermans[1986]; Tarrow[1988]; 長谷川[1990])。その結果、例えば、Wieviorka(2005)は、「対決の政治」とトゥレーヌたちの研究では、文化的レベルか政治的レベルかというように水準が異なるのだとして、最終的には自分たちの理論的枠組みのなかに他方を回収していくかたちで自己理解を形成している。反対方向へ回収していく例は数多いが、上述のKlandermans(1986)、Tarrow(1988)の他、日本では成・角(1998)、渡辺(2000)、長谷川(2004)など。

⁽⁵⁾ ただし、大畑自身は、日本の社会運動論の状況についてのみ論じている。本稿執筆中に出版された『社会学評論』の社会運動特集(大畑・木下[2006])も参照。

⁽⁶⁾ 師L.ウイトゲンシュタインからケンブリッジ大学哲学教授職後継に指名された分析哲学者。

大畑の研究は、日本の社会運動論者が一方に偏らずに両系譜についての研究を進めてきた成果であり、世界的にみてもまだ例のない貴重な成果だといえよう。筆者自身も、別稿（濱西 2005b）において、ウリクト＝大畑の方法論的区分を、現代の国際的な「分裂」に適用するかたちで方法論的に下位区分し、拡張した⁽⁸⁾。下表はそれを若干修正したものであるが、現段階において、もっとも広範な運動研究を方法論的に整理したものだと考えている（表1）。

表1：運動研究の科学方法論的レパートリー

運動の 説明 ⁽⁹⁾	「対決の政治」 / 総合理論 / …				
	動員構造	機会構造	フレーミング	対決レパートリー	…
運動の 解釈		理論的解釈のみ（実体論的）		理論的解釈の経験的検証	
	集合体レベル	ex) Habermas, Offe, …		ex) Touraine, Melucci, …	
	個人レベルから	ex) Giddens, Beck, Bauman, …		ex) トゥレーヌ学派, …	

とはいえ、このような方法論的整理・統合の試みは、まだ萌芽的なレベルに留まっており、本稿では、その更なる発展を願って、あえて従来の方法論的検討における問題点を指摘し、その修正を図ることにしたい。その問題点は、これまでの方法論的整理・統合の試みが、科学方法論に依拠することから生じるものである。すなわち、科学方法論とは、そもそも科学的営みの成立条件を論じるものであり、科学的営みとそれ以外とを峻別すること自体を疑うようなアプローチを、その射程から排除してしまうのである。たとえば、そのような懐疑をもっとも鮮明に押し出しているアプローチは、エスノメソドロジー（以下EMと略記）であり、EMほどではないにしろ一部の構築主義や、EMとその構築主義の混

⁽⁷⁾ 資源動員論や政治的機会構造論の研究を進めつつ、同時に運動論の「文化論的転回」を主張し、その延長上での「新しい社会運動論」の再評価（野宮 2002）にも関わった野宮大志郎も、ごく最近、「社会運動論」イコール＜社会運動の一般的メカニズムに関する中範囲理論（資源動員論・政治的機会構造論・フレーミング論・運動レパートリー論など）＞という見方を否定し、「社会運動が現代社会にとっていかなる意味を持つのか、何をもたらすのか」を論じる議論も「社会運動論」であり、両者は「思考の範疇」が「異なる」のだと述べている（野宮[2006: 234-235]）。後者の範疇にあたるものとして、ギデنزなどのグローバル化と運動に関する議論を挙げ、またトゥレーヌやハーバマスもそこに位置づけられることを示唆している。野宮は、大畑（2004）にはまったく触れていないが、「動員のプロセスやメカニズムを捉える努力」とは、「運動の説明」の一局面に他ならず、「社会運動が現代社会にとっていかなる意味を持つのか、何をもたらすのかについての考究」、「社会運動現象を取り巻く世界の中で社会運動はいかに働くのか、変革の力はあるのか、それはどこに由来するのか」を問う議論は、まさに「運動の解釈」論（のひとつのバージョン）だといえるのであり、野宮の「思考の範疇」という区分は、大畑の方法論的区分とはほぼ一致するものである。

⁽⁸⁾ ただし、そこでは「運動の解釈」をモダニティ論と過度に結び付けて説明してしまった。

⁽⁹⁾ 本来は、総合理論（McAdam, Tarrow, and Tilly[2001: 14-17]）、「対決の政治」（McAdam, Tarrow, and Tilly[2001: 45]）それぞれについて、詳細な下位区分が存在する。

合形態もそのような懷疑を表明している⁽¹⁰⁾。しかしながら、それらにもとづく運動研究は重要なものでありながら、科学方法論に依拠する方法論的検討においては取り上げられることがないのである。

もちろん、それらを今後も無視していくという方向性もありえるかもしれない。だが、科学方法論という狭い枠組みに縛られるよりも、それをより包括的な方法論的枠組みへと拡張することによって、それら全体を包摂することができるのであれば、そのほうが運動研究の方法的レパートリーの拡充という点で、社会運動論の更なる発展につながるといえよう⁽¹¹⁾。次節では、まずこれら3つのアプローチがいかなる意味で懷疑的であるのかをより具体的に確認し、それらの関係性について考察していくことにしたい。

3. 懷疑的アプローチ

(1) エスノメソドロジー

80年代後半から90年代にかけてのガーフィンケルの論文集をコンパクトにまとめた、椎野（1994）によれば⁽¹²⁾、EMであるか否かにかかわらず、「社会学的研究プログラム」の研究対象の候補が「秩序*トピック」であるという点は共通しているという（ガーフィンケルは、「秩序（order）」という言葉が独特の意味で用いられていることを示すために「*」を付けている）。秩序*トピックとは、「どのようなものであれ何らかの形式的構造の合理的特性として考えられる無限の用語・述語」のことであり、具体的には、「理性・論理・意味・証明・斉一性・一般化・普遍・比較可能性・明瞭性・一貫性・整合性・客観

⁽¹⁰⁾ 科学的営みの特権化を反省しようとする議論は他にも存在する、という見方もあるかもしれないが、本稿では、＜科学的営みとそれ以外を峻別した上で科学者の特権性を自覚的・反省的に乗り越えようとするアプローチ＞と＜科学的営みとそれ以外とを峻別すること自体を避けようとするアプローチ＞とを区別している。前者は中河（2006: 250）のいう「折り返す」タイプのリフレキシビティに基づくものであり、そのリフレキシビティの典型例として、中河は、「グールドナーやブルデューのもの（自己反省性、再帰性などと訳される）」を挙げている。他方、本稿においてこれから検討されるのは、後者の＜科学的営みとそれ以外とを峻別すること自体を避けようとするアプローチ＞のほうであり、中河のいうところの「折り返さない」タイプのリフレキシビティに基づくものである。そのリフレキシビティの典型例として中河は「ガーフィンケルと、そしてルーマンのもの（「相互反映性」と訳される）」を挙げている。本稿ではルーマン理論と運動研究の関係についての検討はおこなわない。小松（2003: 5章）などをご覧いただきたい。

⁽¹¹⁾ 筆者は基本的に諸方法の並存状態を好ましいものと捉えている。実際、科学の発展の歴史とは方法論的収斂の結果というより、方法論的並存の結果だというP.ファイアアーベントの見方もある。（「複数主義的方法論」）「われわれが探求しようとする世界は、大部分は未知の存在だということである。それゆえわれわれは選択の自由を保持しておかねばならないのであり、前もって自己規制をしてはならないのである」（Feyerabend[1975=1981: 4-20]）。

⁽¹²⁾ 他に北澤（1991）、Maynard & Clayman（1991）、Atkinson（1988）の議論も参照している。

性・客観的知識・細部・構造などといったあらゆるトピックの代理物」、「目的・合理的行為・同一性・方法・意識」、「規則・記号・産出・原因・探求・証拠・知識・実践的行為・信頼性・妥当性・観察可能性」、「説得力・分析・秩序・事実性」など、「知識史 (intellectual history) におけるあらゆるトピック」を指すとされる (椎野 [1994: 189])。そして、その「秩序*トピック」を、「秩序*現象」として読解する作業が、「社会学的研究プログラム」であるという。「秩序*現象」とは、「不朽の普通の社会において／について／として (in, about, and as immortal ordinary society)」あるいは「普通の社会のワーキングにおいて／から成るものとして (in-and-as-of-the-workings-of-ordinary-society)」という形容詞がつくものであり、(日常の実際の) 実践的な活動=行為としてあるもの、とされる。それゆえEMであるか否かに関わらず、「社会学的研究プログラム」とは、「普通の社会の産出とその説明=叙述可能性を、すなわち実践的活動=行為の形式的構造の合理的な説明=叙述可能性を再特定化する」作業なのだという (ibid: 190)。

では、EMとそれ以外の違いはどこにあるのか。ガーフィンケルによれば、「秩序*トピック」を「秩序*現象」として読解する仕方が違うのだという。EMとは異なる社会学的研究プログラムの代表として挙げられているT.パーソンズの行為理論は、ガーフィンケルによれば、「具体的な活動=行為」と「分析的な活動=行為」を区別した上で、「具体性vs分析のペアを用いて、具体的な活動=行為には秩序性がない」ということを主張するものである (ibid: 191-192)。つまり、形式的分析的社会学においては、秩序*トピックは、具体的な活動=行為においては、秩序*現象として組織化されず、構築的分析を通して産出された分析的な活動=行為においてはじめて組織化されるとみなされる。つまり、研究者の分析的活動は、当事者の活動とは別種のものとして位置づけられている。

それに対してEMは、「どのような秩序*トピックも、ただ単に局所的に相互反動的に産出され、自然に叙述可能な秩序*現象として、発見され発見可能であり、再特定化され再特定化可能なものである」と考える⁽¹³⁾ (つまり、研究対象は共通で、読解の仕方だけが異なる)。ただ、「そうした秩序*現象とは、伝統的研究から見れば、不朽の普通の社会の陳腐な平俗な見慣れた不可避で矯正不能な、興味のわからない「市井のワーク」なのである」 (ibid: 193)。もちろん、EMにおいても、「方法=手続き=実践」だけに分析・記述の焦点をあてるために、「自然的態度」の括弧入れは行われる (Maynard & Clayman[1991])。

⁽¹³⁾ EM初期のエスノグラフィーや、ワークの研究では、その場が特定の制度的状況であるということ的前提にしているようにみえるし、会話に先立つあらゆる背景カテゴリーを括弧に入れるラディカルな会話分析においてもまったく状況が書かれないということは滅多にない (Maynard & Clayman[1991])。とはいえ、EMは、自らの方法的規準と、「社会学」として成り立つものとのあいだのギリギリのラインを見つけ出そうとしているのである。

だがそのような括弧入れは研究者だけでなく誰しもが行うことの出来る作業とみなされている（会話でも「言い間違い」があるように、上達や技能の程度はあるが）。それゆえ、研究者の活動と人びとの活動は、習熟の違いはあれ、基本的に同種の活動とみなされているのである。

（２）構築主義

構築主義にはいくつかのバージョンがあるが、ここでは最も明確な議論を展開していると思われる「社会問題の構築主義」を取り上げる（そのバージョンがいわゆる「構築主義」の中心だと言っているのではない）。とりわけ、いわゆる「構築主義論争」を経た後のバージョンで、しかもその提唱者を著者の一人として含む、イバラとキツセ（Ibarra & Kitsuse[1993]）のバージョンを紹介しよう。それによれば、社会問題の構築主義者が関心をもつのは、「クレイム申し立て」（claim-making）であり、分析の出発点となるものは、「クレイム申し立て活動の参加者が提示する想定された状態についての記述と、その状態の問題とされる性質をめぐる主張（つまり定義）」である。その調査課題は、社会問題に関する「メンバーの定義が「その問題」についてのメンバーの概念をどのように表現するか、それはどのようにして、誰に対してクレイムとして提示され、その提示にあたってどのような材料が動員されるか」ということである（Ibarra & Kitsuse[1993: 51]）。

このような「（社会問題の）構築主義」アプローチは、科学的営みとそれ以外とを峻別するものであろうか。その問いの答えは、この場合の「秩序*トピック」が何であるかに依存している。もし「クレイム申し立て」が「秩序*トピック」であるとすれば、「クレイム申し立て」という活動が人びとによって自然に組織化されていると考えるか否かが重要になるが、そのような概念は研究者側がつくったものであり、従って誰が「クレイム申し立て活動の参加者」であるかを判断できるのは研究者だけだということになるだろう。他方、もし「人びとが提示する想定された状態についての記述と、その状態の問題とされる性質をめぐる主張（つまり定義）」、つまり「状態のカテゴリー」を「秩序*トピック」とみなすならば、それらは人びとによって自然に組織化されていると考えてもおかしくはない。その活動に参加しているかどうかは人びと自身によって、自然に認識することの可能なものであり、科学的営みとそれ以外を峻別することはなくなる。実際、イバラとキツセは、人びとにそのような能力があると考えているようだ。例えば「社会のメンバーは、社会の状態（もしくは「状態と想定されるもの」）を道徳的な客体として構築する作業に積極的に携わる、知覚を備えた主体」（ibid: 48-49）というような記述や、「[メンバーの：記

者注]実践と知覚の組織化の方法」というような記述からそう言える (ibid: 49) ⁽¹⁴⁾。その場合、「クレイム申し立て」(活動) という概念をわざわざ持ち出す意味が見えづらくなるわけだが、例えば、上記のような人びとの活動が起こりやすい場面・状況をぼんやりと指し示す概念 ⁽¹⁵⁾ として理解することも可能である。それは、後述するEMのワークの研究における個々の「制度状況」を指し示す概念(「裁判所」や「陪審員室」と同じような役割をもつだろう。ただいずれにせよ、構築主義は、(このような補足を要する点にみられるように) EMほどは明確な懐疑的な態度を示しているわけではないといえよう。

(3) 分析的括弧入れ

最後に、相対的にEM寄りの構築主義的立場を取っているJ.グブリアムやJ.ホルスタインらによって考案された「分析的括弧入れ」(analytic bracketing) というアプローチについて考えたい。彼らは、そのアプローチについて以下のように言う。

「われわれは、分析への準備として現象を括弧入れするよりもむしろ、分析とともに作動する、分析的括弧入れと呼ぶものを使用する。その手続きは、つまるところ、実践に関するより完全な描像を作り上げるために、二者択一的に、whatsを、つぎにhowsを括弧入れする。その目的は、二者択一的に各々を記述し、その過程で他方を有意味に参照しながら、構成的な活動と実質的な資源との間を往復することにある。」(Gubrium & Holstein[1997: 119])

つまり「分析的括弧入れ」とは、現象学やEM、構築主義などにみられる<「自然的態度」の括弧入れ>のA・プリオリ性に対して、分析にそって括弧入れの対象を変える新しい作業を提示するものである ⁽¹⁶⁾。グブリアムとホルスタインによれば、「分析的括弧入れ」

⁽¹⁴⁾ 他方でキツセらは、構築主義においては、「メンバーが言語的な生産物と活動(シュッツの用語で言えば第一次的構築)を提供し、次に社会学者がそれを対象にして(実践的な吟味とは相容れない)分析的な吟味(つまり第二次的構築)を行う」という記述や、「メンバーは、記述や解釈や評価といった活動を通じて、間主観的なシンボルを使って構築し、それに道徳的な性格を付与」し、研究者は「こうした相互作用の現場でメンバーが使う定式化や記述、解釈などの手段を、・・・分析的にいいかえ」、そして「イデオロム慣用語法を使って生み出される社会問題の構成をめぐる前提やコンベンション慣行、カテゴリーやセンシビリティ感受性がどのような形をとるかを明らかにする」、といった記述をおこなっている (ibid: 52-53)。そこでは、構築主義は、科学的営みとそれ以外とのあいだに、単に関心や熟達の違いにおさまらない根本的な区分線を引いているようにみえる(ただし、それでも、EMのように「実践的推論」という能力は共有されていて単に関心の持ち方や熟達度が異なるということを意味していると読めなくもない)。

⁽¹⁵⁾ 中河(2006: 170-171)や平・中河(2006: 314-315)は、「クレイム申し立て」という用語がH.ブルーマーの「感受概念」(sensitizing concept)のようなものであり、「人々の社会問題活動への入り口を探すための、一つの発見的な道具」であり、「それに依拠して、いったん調べたい人びとの活動の観察を開始したら、その先の記述や考察にあたっては捨ててしまってもかまわない」ものだといっている。

は、例えば社会問題研究の場合には、「what」に関わる「社会問題の構築主義」的研究と、「how」に関わる「社会問題のワーク」⁽¹⁷⁾の研究とを二者択一的に組み合わせたものだという。そして、彼らは「分析的括弧入れ」によって、「相互作用や会話の実践、解釈の資源に焦点を合わせ」つつ、「ローカルな達成への分析的関心を、たとえば集合表象へのデュルケムの関心・・・やディスコースとまなざしへのフーコーの関心・・・のような、もっと構造的な関心や文化的な関心へと結び付ける」ことも可能になり、「社会問題の構築主義」における「公共性や社会問題のレトリックについて」の関心と、「社会問題のワーク」における「社会問題がローカルに運営され相互作用的に産出されるという側面」への関心が結びつくことで「社会問題の構築についての研究を豊饒化し、多様化する」と期待している (ibid: 116-117)。

グブリウムとホルスタインは、「社会問題のカテゴリー（イバラとキツセの用語で言えば「状態のカテゴリー」）は、対象やできごとを理解するために採用される可能性がある構造にすぎない」として、ワークの研究と結び付ける準備段階として、構築主義を「状態のカテゴリー」に焦点を合わせ、「方法・手続き」等を括弧入れするひとつのアプローチとして洗練させている⁽¹⁸⁾。その上で彼らは、構築主義アプローチを、「方法・手続き」に焦点をあわせ、様々な「自然的態度」を括弧入れするワークの研究と組み合わせている。また、どちらの括弧入れの作業も、そしてそれらを往復する作業も、研究者だけでなく誰しも行うことの出来るものとしている。それゆえ、「分析的括弧入れ」は、科学的営みとそれ以外とを峻別することについて、EMほどではないが、懐疑的だといえるのである。

4. 方法論的レパートリーの拡充

前節での検討から、EM、構築主義、「分析的括弧入れ」のそれぞれが、科学的営みとそれ以外の峻別に対する懐疑的姿勢を維持しつつ、経験的研究のプログラムの構築に取り組んでいることが確認されただろう。また、懐疑の度合いにおいてEMを頂点としたグラデ

⁽¹⁶⁾ 中河 (2001) の提案する「howとwhatを問う」構築主義アプローチは、この「分析的括弧入れ」と似ているが異なる。グブリウムらは、「how」を問う研究と「what」を問う研究の関係を、互いの成果を前提にして積み重ねをおこなっていくようなイメージでとらえている（「より完全な描像を作り上げる」という記述）。だが、中河の場合は、「how」を問う研究と「what」を問う研究のあいだにあるのは、「言説の連鎖」の関係性である。

⁽¹⁷⁾ 「社会問題のワーク」とは、ホルスタインとミラーによれば、「社会問題のディスコースにおいて同定することができる対象を産出するために、すでに公共的に確立された社会問題のカテゴリーを経験に貼り付ける解釈活動」のことである (Holstein & Miller[1993: 116-117])。

⁽¹⁸⁾ つまり、注14で示されているような曖昧な側面を除くかたちでの洗練がなされている。とはいえ、注16で紹介した中河 (2001) の試みの方がさらに洗練されている。

ーションが存在することも示唆された。本節では、EM、構築主義、「分析的括弧入れ」、それぞれにおける運動研究の具体的形態について、事例を交えながら整理していきたい。

(1) 社会運動のエスノメソドロジー

EMにおける運動研究とはいかなるものになるだろうか。会話分析やEM的言説分析⁽¹⁹⁾、論理文法分析、成員性カテゴリー化分析（Cf. 4節（2）で紹介するHester & Eglin[2003]）など様々な方法を運動研究に適用することはおそらく可能であろう。その中でもとりわけ、＜制度的状況のワークの研究＞は、運動組織やNPO、NGOをフィールドにして実施しやすいだろう。すでに「社会問題のワーク」については3節（3）で少し紹介したが、「ワークの研究」とは、EM初期の制度的状況下のエスノグラフィーの延長線上にあるものであり、たとえば、「彼らのどのような活動が彼らを陪審員たらしめているのか」といった「実践的推理と具現化された活動＝行為の経過をより正確に記述する」アプローチである（Maynard & Clayman[1991: 408]）。このアプローチを「社会運動」「NPO」「NGO」といった制度的状況に適用することで、その状況に固有の実践（相互作用や会話）を、通常の日常的な実践を参照しつつ、明らかにすることできるだろう⁽²⁰⁾。運動参加者によっていかに状況が解釈され場が組織化されていくかが、研究者によって記述されていくのである。

たとえば、筆者がおこなったフィールドワーク（Cf. 濱西[2005a]）に関連付けていえば、学生・運動家中心の「団体B」と地元名士・コンサルタント中心の「団体C」という2つの異なるLETS（地域通貨）団体に関するワークの研究からは、時間のルーズさ／こまかい議題設定、議論の沸騰／議論の打ち切り、予定のあいまいさ／明確さ、時限的プロジェクト中心／持続的役割分担といった違いが、両団体のあいだで、さまざまな事例をとおして浮かび上がる可能性がある。その際、それらがどこまでその文脈に固有の現象であるかどうかは人々の実践を非常に細かくみて、その実践を通して示されなくてはいけないし⁽²¹⁾、また「学生」「運動家」「地元名士」「コンサルタント」といった参加者の属性自体が前も

⁽¹⁹⁾ たとえば、「産児調整運動の特に前期（1910年代中頃から1920年代中頃まで）に集中的に産出された、運動の状況理解、自己理解を語る言説を考察することで、産児調整運動がいかなる言説によって編成される運動であったのか」等を明らかにしようとする石井（2003）の研究などは、EM的言説分析の好例だといえる。

⁽²⁰⁾ ただし、会話分析の厳格派（シュグロフなど）が心配するように、日常的な実践それ自体がまだまだ蓄積が足りない状況にあっては、往々にしてそういった比較分析は非常に高い確率で「勇み足」になりやすく、慎重さを要する。

⁽²¹⁾ 実際には順序が逆で、人々がそういう呈示をしているがゆえに、その状況が固有なものとして現れるということである。

って述べられるのではなく、やはり具体的な実践（＝ワーク）を通して示されなくてはならない。それが局所的に産出され自然言語において編成された、相互反映的に叙述可能な秩序*現象を記述するということである。

（２）社会運動への構築主義アプローチ

社会問題の構築主義者が、社会問題の「状態」から「クレーム申し立て」へと対象をずらしたのは、「社会のメンバーは、社会の状態（もしくは「状態と想定されるもの」）を道徳的な客体として構築する作業に積極的に携わる、知覚を備えた主体として観察され解釈の対象にされる」という考え方にたった場合、「定義過程が研究対象の中心になり、メンバーの解釈実践こそが研究の優先課題であるべきだということに」なったからであった。まったくおなじことが、社会運動への構築主義アプローチにも言えよう。つまり、＜人々が自分たちの活動やほかの人々の活動（あるいはそうみなされた「状態のカテゴリー」）を「運動」として解釈する定義的实践＞こそが、研究の優先課題となるはずである。社会問題への構築主義アプローチとアナロジーに考えるなら、社会運動への構築主義アプローチにおいても、言語的やり取りのプロセスの時間的空間的範囲がさまざまにとりうるし、個人がまったく単独で社会運動に関する発言をするケースも対象にすることできる。また、その定義的实践の過程に、「習慣化した想定や解釈実践、レトリックの装置、協同活動、そして、様々な公開討論の場」、加えて具体的な直接的衝突、身体的暴力などが「一役を買う」ことになり、研究者の仕事は、「慣用語法^{イディオム}を使って生み出される社会問題の構成をめぐる前提や慣行^{コンベンション}、カテゴリーや感受性がどのような形をとるか^{センシビリティ}を明らかにすること」だということになる。

このように社会運動の構築主義アプローチを定めるならば、従来、構築主義的運動研究とみなされてきたもののなかで、「集合行為フレーム分析」や一部の「集合的アイデンティティ」分析などはそこから除外されることになるだろう。なぜならそれらは、ある活動（あるいはそのようにみなされた「状態のカテゴリー」）を「社会運動」として解釈する定義的实践を対象にするのではなく、＜実体としての集合行為がその要素である個々人の言説・相互作用などから構成されるプロセス＞を対象にしているにすぎないからである⁽²²⁾。

⁽²²⁾ 栗田（2002）は、「懐疑的な認識論」の立場から、資源動員論の素朴実在論を批判し、「構築主義の視座から」の「社会運動と文化」研究へのアプローチ（那須[1990]のいう「現実構成パラダイム」もそれに近い）を提案しているが、その際、本稿とおなじく、キツセらの社会問題の構築主義における研究対象の定式化とアナロジーなかたちで、社会運動の構築主義の研究対象を定式化している。ただし、その事例として、足立（1998）に加えて、荻野（1998）を挙げている点は本稿の議論と異なる。荻野の研究は「運

前述の意味での構築主義的運動研究においては、いわば＜個々人の言語的やり取りによって社会運動（のある局面）が構成される＞のではなく、＜言語的やり取りとして「社会運動」が構築される＞のでなくてはならない⁽²³⁾。

他方、EMのなかの「成員性カテゴリー化分析」(MCA)の手法を用いたヘスターとエグリンの「テロリズム」研究(Hester & Eglin[2003])は、ある活動が「社会運動」と定義されたり、「テロリズム」と定義されたりする実際の状況に照らせば、社会運動をめぐる言説的やり取りに間接的に関わるレトリック的な装置の分析と見なすことができる。それゆえ、構築主義的な運動研究の一例とみなすことができる⁽²⁴⁾。また構築主義(Ibarra & Kitsuse[1993])の枠組をもちいて「テロリズム」言説を分析したW.J.スウォート(Swart[1994])やP.ジェンキンス(Jenkins[1999])の研究も、同じく構築主義的な運動研究とみなせるだろう。

(3)「分析的括弧入れ」による運動研究

最後に、「分析的括弧入れ」を用いた運動研究は、社会問題研究の場合と同じように、社会運動への構築主義アプローチと、社会運動状況のワークの研究が組み合わさったものになる。この方法を適用した事例としては、グブリアムとホルスタインに指導に受けたクロリーとブロードによる、LGBT(レズ・ゲイ・バイセクシャル・トランスセクシャル)団体研究(Crawley & Broad[2004])が挙げられるだろう。クロリーらによれば、あるLGBT団体は、大学の教室で、LGBTへのステレオタイプな見方を変えさせるべく、会員が自らのライフストーリー(whats)を、団体のガイドラインにそって、あるいはズラして語り、参加者と質疑応答するという実践(hows)を行っている。そこで、LGBTについての人々のステレオタイプを解体すべく「個人」を呈示し「性」以外のことを呈示する語りの内容(whats)がレトリックとともに記述され、つぎに団体のガイドラインと(ステレオタイプに縛られていると団体メンバーから想定されている)敵手としての聴衆の存在をリソースとして類型化(一員として語る／感情をこめて語る／他の人[LであればGBT]を語る／抑圧されている人として語る)された語りの方法(hows)が、さまざまな戦術

動の説明」に属する「集合行為フレーム分析」であり、よく程度の違い(「極端さ」)のように誤解されているが、キツセらの構築主義的アプローチとは根本的に異なるものである。

⁽²³⁾ 実際には、キツセらの構築主義が「言説行為(クレイム申し立て)による相互作用をつうじて問題が構成されるところ(立場)」(帯谷[2004: 9])と理解されていることは少なくない。

⁽²⁴⁾ 逆に本稿で定式化したような意味でのEM的研究の範疇に、彼らの研究が完全に包摂されるかというふうではあるまい。

として記述されるのだ。

クローリーらによれば、このような運動研究は、伝統的な運動研究とも結びつくという。たとえば、公の問題の産出やアクティビズムにおいて、LGBTメンバーの「私的」であると同時に「政治的」な語りかけがその内容と方法においてどのようになされるのかという問い、より一般的には、「社会運動のストーリーは、外部の聴衆に向けてどのように語られるのか」、運動の「参加者は自分たちのライフストーリーを、敵対者とみなされる外部の聴衆にむけてどのように語るか」といった問題へと接続されるという。加えて、それらの問題は、運動論の重要な課題であると同時に、社会問題の構築主義にとっての研究対象にも関わるのであり、クローリーらは、ライフストーリーを語る団体メンバーが個々人であるようなこのような運動事例においては、社会運動論と構築主義社会問題論は重なってくると述べている⁽²⁵⁾。

また「分析的括弧入れ」のインタビュー・バージョンといえる、有名な「アクティヴ・インタビュー」法（Gubrium & Holstein[1995=2004]）をもちいた運動研究も考えられるだろう。さらにそのグループ・インタビューのバージョンは、トゥレーヌの「社会学的介入」を土台にして、メルッチが考案した「実験的性質分析」（Melucci[1989=1997: 318-346]; 濱西[2004]）と形式的には近くなる。というのも、その方法には、現象学的段階と解釈的段階という二つの段階があり、現象学的段階は、アクティヴ・インタビューが析出させる「多声性」をさらに強化するリソースとして、「刺激」（グループワークや敵手の語りなど）をグループに与え、人びとがどのような相互作用を通じて集合的アイデンティティを構築していくかをビデオ録画して観察する、その名も「how」（方法）という小段階を中心としたものであるし、続く解釈的段階は、いくつかの運動団体における集合的アイデンティティの構築過程を比較するものであり、それは構築されたものの「内容」を検討する段階とみなせるからである⁽²⁶⁾。

5. 結論

大畑は運動研究を「運動の説明」と「運動の解釈」に区別し、筆者（濱西2005b）はその下位区分をおこなった。それらの試みの問題点は、科学的営みとそれ以外とを峻別する

⁽²⁵⁾ 同じことが、たとえば、「ヒロシマ」や「従軍慰安婦」の一人一人の語り部の活動や内部告発者の孤独な活動などを対象にした運動研究にもいえるかもしれない。

⁽²⁶⁾ ただしメルッチの実験的性質分析では、「内容」と「方法」の分析が往復せず、「方法」と「内容」が断絶している。むしろそれは、注10で紹介したような、＜科学的営みとそれ以外を峻別した上で科学者の特権性を自覚的・反省的に乗り越えようとするアプローチ＞に近いのかもしれない。

ことに懐疑的なアプローチを排除してしまうことにあり、本稿ではその点を修正するべく、排除される運動研究の具体的形態を紹介してきた。これまで大畑や筆者が扱ってきたのが、いわば研究者による科学的営みとしての「運動の説明」・「運動の解釈」だとすれば、本稿で検討してきた懐疑的なアプローチによる運動研究は、人びとによる「運動の解釈」と呼べるような関係にあるといえる。というのも、EMに代表される懐疑的なアプローチの関心は、人びとによってその状況が「何であるか」解釈され、その状況が組織化されるプロセスにあるのであり、また研究者の営みもそれと基本的に区別されない解釈・組織化の過程として考えられているので、研究者による営みであったとしても広く「人びとによる運動の解釈（・組織化）」と呼ぶしかないからである⁽²⁷⁾。また、懐疑的なアプローチの内部にも、懐疑の度合いにおいてEMを頂点としたグラデーションが存在することも確認された。上述の科学方法論にもとづく方法論的整理（表1）に、これまで考察してきたEM、構築主義、分析的括弧入れにもとづく運動研究を位置づけ、方法論的レパートリーを拡充すると、表2のようになるだろう。

表2：運動研究の新しい方法論的レパートリー

運動の説明	「対決の政治」 / 総合理論 / …			
	動員構造	政治的機会構造	文化的フレーミング	…
運動の解釈		理論的解釈のみ（実体的論的）	理論的解釈の経験的検証	
	集合体レベル	ex) Habermas, Offe, …	ex) Touraine, Melucci, …	
	個人レベルから	ex) Giddens, Beck, Bauman, …	ex) トウレーヌ学派, …	
人々の「運動の解釈」	社会運動への構築主義アプローチ		ex) Swart, Hester & Eglin, …	
	「分析的括弧入れ」による運動研究		ex) Crawley & Broad, …	
	社会運動のエスノメソドロジー		ex) 運動状況下のワーク研究, …	

本稿でおこなった社会運動論の方法論的検討は、さらに展開することができる。例えば、より伝統的な、すでに乗り越えられたと思われるようなアプローチについても、方法論の観点から再検討することができる⁽²⁸⁾。＜伝統的運動研究は、資源動員論によって乗り越えられた＞といわれることは多いが、伝統的な運動研究の中で、明確に「運動の説明」といえるものは「相対的剥奪論」（Gurr, Geshevender）や一部の「大衆社会論」（Kornhauser）だけであり、運動の類型論を展開しつつ運動参加者の意味世界（宝月

⁽²⁷⁾ より正確には、「運動状況下における人びとの解釈（・組織化）」と呼ぶべきかもしれない。

⁽²⁸⁾ その他にも歴史学者による膨大な運動研究（Cf. 広川・山田[2006]）のなかには福島（2006）のように「抵抗の〈声〉を具体的に追い、その意味を具体的に分析」する歴史的解釈の試みがあるし、人類学の「抵抗論」にもそのような試みが存在している。それらもまた「運動の解釈」の一形態として位置付けられるかもしれない。

[1990]; 吉田[1991]; Zygmunt[1986]) を探求する相互作用論的集合行動論や、機能主義的集合行動論の類型論部分(曾良中[1967])、そして全体主義的運動(ナチズムや komunizm) の否定的解釈を試みる H. Arendt らの大衆社会論は、むしろ「運動の解釈」の範疇に含めるべきであろう。運動論史全体の根本的な方法論的再考が求められる。

謝辞：本稿準備段階において、中河伸俊先生(大阪府立大学)や大学院の先輩方、レフェリーの方々から貴重なご意見を頂いた。

参考文献

- 足立重和、1998、「あいつはここに住んでいない」山田富秋・好井裕明編『エスノメソドロジーの想像力』せりか書房、pp.150-169.
- Atkinson, P., 1988, "Ethnomethodology: A Critical Review," *Annual Review of Sociology*, 14: 441-465.
- Crawley, S. L. & K. L. Broad, 2004, "'Be Your (Real Lesbian) Self': Mobilizing Sexual Formula Stories through Personal (and Political) Storytelling," *Journal of Contemporary Ethnography*, 33 (1): 39-71.
- Feyerabend, P. K., *Against Method: Outline of an Anarchistic Theory of Knowledge*, London: New Left Books. (=1981[2006]、村上陽一郎・渡辺博訳『方法への挑戦——科学的創造と知のアナーキズム』新曜社.)
- Gubrium, J. B. & J. A. Holstein, 1995, *The Active Interview*, Sage. (=2004、山田富秋・倉石一郎・兼子一・矢原隆行訳『アクティヴ・インタビュー——相互行為としての社会調査』せりか書房.)
- _____, 1997, *The New Language of Qualitative Method*, NY, Oxford: Oxford University Press.
- 長谷川公一、1990、「資源動員論と「新しい社会運動」論」社会運動論研究会編『社会運動論の統合をめざして』成文堂、pp.3-28.
- 濱西栄司、2004、「社会学的介入の理論と実践——アラン・トゥレーヌ、フランクフルト学派、ヴァンセンヌ学派」『現代社会理論研究』14: 114-127.
- _____, 2005a、「集合的アイデンティティから経験運動へ——トゥレーヌ学派モデル/社会学的介入による LETS・変容の事例分析」『ソシオロジ』154: 69-85.
- _____, 2005b、「社会運動の個人化——社会的排除・ホームレスギャング・拒食症・落書き・エスニシティ——Kevin McDonald, *Struggles for Subjectivity: Identity, Action and Youth Experience*, 1999」『京都社会学年報』13: 115-125.
- _____, forthcoming, 「社会運動の新しい形 (トゥレーヌ『声とまなざし』『ポスト社会主義』)」「社会学ベーシックス 第2巻: 社会の構造と変動 (マクロ社会学)」.
- Hester, S. & P. Eglin, 2003, *The Montreal Massacre: A Story of Membership Categorization Analysis*, Waterloo, Ont.: Wilfrid Laurier University Press.
- 広川禎秀・山田敬男編、2006、『戦後社会運動史論——1950年代を中心に』大月書店.
- 福島在行、2006、「『内灘闘争』と抵抗の〈声〉」広川禎秀・山田敬男編『戦後社会運動史論——1950年代を中心に』大月書店、pp.134-155.
- Holstein, J. A. & G. Miller, 1993, "Reconstituting the Constructionist Program," Holstein & G. Miller eds., *Reconsidering Social Constructionism*, NY: Aldine de Gruyter, pp.241-250.
- 宝月誠、1990、『逸脱論の研究——レイベリング論から社会的相互作用論へ』恒星社厚生閣.
- 稲葉奈々子、2004、「排除社会と社会運動論——八〇年代以降のトゥレーヌ学派」『社会学研究』76: 75-98.
- 石井孝夫、2003、「生殖の文法——ある生殖意識変革運動の言説編成について」佐藤慶幸・那須壽・大屋幸恵・菅原謙編著『市民社会と批判的公共性』文真堂、pp.279-311.
- Jenkins, P., 1999, "Fighting Terrorism As If Women Mattered: Anti-Abortion Violence as Unconstructed Terrorism," Ferrell, J. & N. Websdale eds., *Making Trouble: Cultural*

- Constructions of Crime, Deviance, and Control*, NY: Aldine de Gruyter, pp.319-346.
- 北澤裕、1989、「現実社会の構成とエスノメソドロロジー——主体性への回帰を求めて」『社会学評論』40: 2-16.
- 栗田宣義、2002、「理論と方法論の奇妙な結託」野宮大志郎編著『社会運動と文化』ミネルヴァ書房、pp.27-44.
- Klandermans, B., 1986, "New Social Movements and Resource Mobilization: The European and the American Approach," *International Journal of Mass Emergencies and Disasters*, 1: 13-37.
- Maynard, D. W. & S. E. Clayman, 1991, The Diversity of Ethnomethodology, *Annual Review of Sociology*, 17: 385-418.
- McAdam, D., Tarrow, S. & C. Tilly, 2001[2003], *Dynamics of Contention*, UK: Cambridge University Press.
- Melucci, A., 1989, *Nomads of the Present: Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society*, Philadelphia: Temple University Press. (=1994、山之内靖・貴藤嘉之・宮崎かすみ訳『現在を生きる遊牧民——新しい公共空間の送迎に向けて』岩波書店.)
- 中河伸俊、2001、「方法論のジャングルを越えて——構築主義的な質的探求の可能性」『理論と方法』16 (1): 31-46.
- 、2005、「構築主義とエンピリカル・リサーチャビリティ」『社会学評論』55 (3): 244-259.
- 、2006、「構築主義と言説分析」佐藤俊樹・友枝敏雄編『言説分析の可能性——社会学的方法の迷宮から』、pp.153-182.
- 那須壽、1990、「社会運動組織の新たな概念化をめざして——「現実構成パラダイム」構築の試み」『社会運動理論の統合』成文堂、pp.27-44.
- 野宮大志郎、2002、「社会運動と文化——なぜ運動の「文化」的研究なのか」野宮大志郎編著『社会運動と文化』ミネルヴァ書房、pp.1-26.
- 、2006、「社会運動論から社会理論へ——深化、展開、そして構想力」『社会学評論』57 (2): 223-239.
- 帯谷博明、2004、『ダム建設をめぐる環境運動と地域再生——対立と協働のダイナミズム』昭和堂.
- 大畑裕嗣、2004、「モダニティの変容と社会運動」曾良中清司・町村敬志・長谷川公一・樋口真人編著『社会運動という公共空間——理論と方法のフロンティア』成文堂、pp.156-180.
- 大畑裕嗣・木下康仁、2006、「特集によせて——社会運動の「消滅」と社会運動論の「分裂」を超えて」『社会学評論』57 (2): 220-222.
- 椎野信雄、1994、「エスノメソドロロジー研究の方針と方法について——ラディカルな秩序*現象の再特定化」『社会学評論』45: 188-205.
- 成元哲・角一典、1998、「政治的機会構造の理論射程——社会運動を取りまく政治環境はどこまで操作化できるのか」『ソシオロギス』22: 102-123.
- Swart, W. J., 1994, "Stigma and Charisma in the Rhetoric of Terrorism," *Perspectives on Social Problems*, 5: 73-93.
- 曾良中清司、1967、「社会運動論の系譜と若干の問題——米国の社会学部門を中心に」『社会学評論』68: 2-24.
- 平英美・中河伸俊、2006、「構築主義アプローチの到達点——エンピリカルな見地からの課題と展望」平英美・中河伸俊編『新版|構築主義の社会学——実在論争を超えて』世界思想社、pp.285-328.
- Tarrow, S., 1988, "National Politics and Collective Action: Recent Theory and Research in Western Europe and the United States," *Annual Review of Sociology*, 14: 421-440.
- 、1998, *Power in Movement: Social Movement and Contentious Politics*, second edition, Cambridge University Press. (=2006、大畑裕嗣監訳『社会運動の力』彩流社.)
- Tilly, C. & S. Tarrow, 2007, *Contentious Politics*, Colorado: Paradigm Publishers.
- Touraine, A., 1985, "An Introduction to the Study of Social Movements," *Social Research*, 52 (4): 749-787.
- 、1991, "Commentary on Dieter Rucht's Critique," *Research on Social Movements: The State of the Art in Western Europe and the USA*, Westview Press, pp.385-391.
- 山崎敬一編、2004、『実践エスノメソドロロジー入門』有斐閣.
- 吉田竜司、1994、「群衆行動と日常性——釜ヶ崎第一次暴動を事例として」『ソシオロギス』39 (2): 75-95
- 渡辺勉、2000、「社会運動の国家間比較——政治的機会構造概念の有効性」『理論と方法』、15 (1): 135-148.

- Wieviorka, M., 2005, "After New Social Movements," *Social Movements Studies*, 4 (1): 1-19.
- Wright, G. H. von, 1971, *Explanation and Understanding*, New York: Cornell University Press. (= 1984, 丸山高司・木岡伸夫訳『説明と解釈』産業図書.)
- Zygmunt, J. F., 1986, "Collective Behavior as a Phase of Social Life," *Research in Social Movements, Conflicts and Change*, 9: 25-46.

(はまにし えいじ・修士課程)

New Methodological Repertoires in Social Movement Studies: Ethnomethodology, Constructionism and Analytic-Bracketing

Eiji HAMANISHI

This paper aims at developing a methodological framework for ordering the various kinds of social movement studies.

First, it outlines the present condition of social movement studies. From the early 1980s, there has been a radical theoretical conflict. To illustrate, the International Sociological Association (ISA) now has two research committees on Social Movements, the definitions and orientations of each corresponding to either of the two poles of this theoretical opposition. Furthermore, this paper also points out the significance of Hiroshi Ohata's methodological examination in explaining and interpreting social movements and the problems concerning the standpoint of Ohata. In Ohata's scientific methodological framework, approaches that do not make a distinction between scientific and non-scientific activities are excluded.

Second, I discuss ethnomethodology, constructionism and the analytic-bracketing method, since all these three approaches avoid the rigid distinction between scientific and non-scientific activities without making epistemological "folding-backs". By putting a distinctive emphasis on the production and accountability of phenomena of order*, one can distinguish ethnomethodological studies from classic studies. Constructionist approaches to social problems focus on the claim-making activities of individuals or groups about putative conditions. The analytic-bracketing approach addresses the *whats* (from constructionism) and *hows* (from ethnomethodology) alternately in order to assemble a more complete picture of social activities.

Third, I touch upon the concrete forms of social movement studies following these three approaches above, as well as the relations between them and the conventional social movement studies.

Finally, I attempt to build a more comprehensive framework that could unify all these three approaches and scientific methodological approaches.